

## 今月の一言 NO.222

### キーワード：読書

読書とは「何が書かれているか」ではなく「自分がどう感じるか」だ。

人間と動物を分けるものは何か。それは「言葉を持っている」という点に尽きる。

人間は言葉で思考する。言葉を使って自らの生や死について考え、相手に想いを伝える。

人を説得し、交渉し、関係を切り結ぶ。そして人生を前に進めていく。

一方、動物は言葉を持たない。本能に従って餌を食べ、交尾をし。死んでいく。彼らは生や死について考えることもない代わりに、他者と心が通じ合う喜びも感じない。

言葉を持たない人間は、たとえ人の形をしていても、動物と何ら変わりはないと僕は考える。赤ん坊は言葉を持たない。だから赤ん坊には人生や世界がない。人間を人間たらしめるのは言葉だ。では、人間としての言葉を獲得するにはどうすればいいのか。それは、「読書」をすることにほかならない。

本には、人間社会を理解する上でのすべてが含まれている。人間は途方もなく多様な存在で、自分では想像もできないような考えをもつ他者がいること。ゆえに、人間同士の争いは決して消滅しないこと。すべての意思決定は、人間の感情が引き起こしていること。そのため、他者への想像力を持つことが、人生や仕事を進める上で決定的に重要なこと……。

読書で学べることに比べたら、一人の人間が一生で経験することなど高が知れている。読書をすることは、実生活では経験できない「別の世界」の経験をし、他者への想像力を磨くことを意味する。本のページをめくればめくるほど、人間の美しさや醜さ、葛藤や悩みが見えてくる。そこには、自分の人生だけでは決して味わえない、豊穡な世界が広がっている。そのなかで人は言葉を獲得していくのだ。

著書：読書という荒野 著者：見城 徹

## 感性を磨く

令和2年6月25日

さいのう とおる

追伸：外出できない！人に会えない！などの約3か月でしたが、様々な前向きな取組や変化が起きました。心が変われば、変化は起こせるということです。